

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

アグレッシブなロメオ

【作者名】

猫好き野郎

【あらすじ】

フェアリーテイルの魔導師マカオ・コンボルトの息子ロメオ・コンボルト

彼は本来の歴史より少し…いやかなりアグレッシブだった。その違いがどれほどの変化をもたらすのか。

「俺は絶対強くなる」

1話

「ねえーとーちゃん」

「ん？」

「俺もとーちゃんみたいだなスゲー魔導師になれるかな？」

「つたりまえだ！なんてつたつて俺の息子だからな！頑張ればできる

！」

「うんー！」

ある親子のごく普通の日常。それがたった一つの些細な変化で、とてつもなく大きな変化が起きてしまう。

「オメーの親父、本当にツエーのかよ？いつも酒場で飲んでるじゃんか」

「そーだぞ、実はメチャ弱かったりして」

「アハハハハ！」

「笑うな！とーちゃんはスッゲー魔導師なんだぞ！」

「じゃあ証拠みせてみるよー」

「見せてみるよー」

「今にみてるよー！」

自身の誇りである父を貶され頭に血が上りとつさに買ってしまつたケンカ。本来ならばここで父にすごいクエストに行ってもらいに走って行くのだが…彼は本来より少しアグレッシブだった。

「オラア！」

「グヘッ！」

「何するんだよー！」

「俺が強いからとーちゃんも強い！」

「なんだよそれ」
「うるせえ！食らえ！」

父の強さを証明するために自ら戦いを挑んだ。そして…

「ハアハア……」

「やっと倒れた……」

「こっちは5人掛かりだぞ……」

「何てヤツだよ……」

「くそッ、口が切れた……」

敗れてしまった。流石に数が違いすぎた。子どものケンカは力より数なのだから。

「ほらな！お前もヨエーからお前の親父もヨエーんだよ！」

「……」

彼は立てなかった。何度も立ち上がろうとしたができなかった。心が折れてしまったから。

「アレ？ナツ、あそこに寝てるのってロメオじゃない？」

「お？本当だ。てかなんで道の真ん中で？」

「バカ！倒れてるのよ！そんなことより早く助けてあげないと！」

「そ、そうだな。ロメオ、どうした」

「…ナ、ナツ兄……」

「大丈夫か 何があった！」

「…俺…悔しい」

「」

「…とーちゃんのこと…バカにされたのに何もできなかった……」

「」

「…強くなりたいよ…ナツ兄……」

「…そうか」

ナツはそう言つと優しくロメオを抱き上げギルドへ走って行った。

「じつちゃん!」

「なんじゃあ、騒々しい。また、お前宛に被害届がとるぞ!」

「そんなことより治療を頼む!ロメオが!」

「ロメオじゃと?…誰にやられた?」

「ケンカらしいんだけど、相手が多かつたみたいだよ」

ハッピーはナツが走り去った後、目撃者がいないか探し回っていたのだ。

「ロメオがどうかしたのか」

「マカオ…」

「!…こんなにボロボロに…誰にやられたんだ!知ってんのかハツピー…」

「近所の子どもたちだよ。5人とケンカしてたみたい」

「5人掛かりだと俺が張り倒してやる!」

「待つんじゃマカオ。子ども喧嘩に親が手を出しちやいかん」

「だがよお、マスター!」

「…そうだよとーちゃん」

「ロメオ」

「…そんなことしたらとーちゃんがもつとバカにされちゃう」

「俺がバカにされる?」

何故自分が出てくるのかまったく分からず困惑するマカオ

「ロメオはな、マカオをバカにされてケンカを買ったんだ」

「俺のとーちゃんは弱くないって叫んでたんだって」

「そうか…マスター」

「なんじゃ」

「なんかクエストあるか？」

「…ハコベ山でバルカン討伐の依頼がきておる」

「それ、俺が受ける」

「俺も手伝うぞ！」

「いや、いい。俺一人でやらなきゃなんねえ」

「…そうか」

ナツの申し出を断り、マカオは一人でギルドを出て行った。
息子の誇りを取り戻すために。

2話

「…ハッ！」

「あ、ロメオ君目が覚めた？」

「ミラ姉…」

マカオがギルドを出る直前に意識を失っていたロメオ。

「丸1日寝てたのよ」

「そんなに」

まさか気を失うとは思ひもなかった、そう考えたとき一つ疑問が生まれた。

「ねえ、とーちゃんは？」

「え…」

「ねえったら」

「…ロメオは仕事に行ったわ」

「なんの」

「バルカンの討伐」

「ハア…なんだ、とーちゃんなら大丈夫か」

そのくらい、とーちゃんなら余裕だよ。しかしロメオの考えは甘いものだった。

「けど、20頭のバルカンを一人で倒さないといけないの」

「20頭 何で1人なのさ！」

「マカオが一人でやらなきゃだめだって聞かなくて」
「……」

俺の所為だ…俺があんなこと言わなかったら…

「自分を責めちゃだめよ。これはマカオが自分で決めたんだから」
「でも…」

「それでも不安なら自分の出来ることを全部しなさい」
「…うん、わかった！」

ミラの仕事はロメオを慰めること。うんうん、我ながらいい仕事をしたと感心した。しかしミラはロメオの性格を全て理解できていなかった。ミラの言葉でロメオは決心してしまったのだ。

「ナツ兄はどこ？」

「え？ナツなら酒場にいると思うわよ。」

「ありがとう！」

～フェアリーテイル 酒場～

「ナツ兄〜！」

「ロメオ！大丈夫なのか」

「うん！昨日はありがとう！」

「いいってことよ、気にすんな！」

「で、ナツ兄にお願いがあるんだけどいいかな？」

「ん？なんだ？」

「俺に魔法を教えてよ！」

「マ、ホ、ウ〜」

ナツはまったく予想していなかったお願いであった。てっきりマカオを助けてって頼まれると思っていた。

「うん！とーちゃんが帰ってきたらビックリさせてやるんだ！」
「そういうことが、任せろ！」

「やった！」

「早速特訓だ！表に出る！」

「うん！」

二人はノリノリでギルドから走って行ってしまつた。

「元気ねえ、あの二人」

「あい、それがフェアリーテイルです」

〜ギルド裏の空き地〜

「んじゃ、取り敢えず火出してみる」

「え？」

「火を出してみろって」

ロメオは失敗したと痛感しナツは人に教えるのが上手く無いと直感した。しかし頼んだのは自分、取り敢えずやってみる。

「……」

「違う違う！もっと体の底からガアーツて感じだよ！」

意味不明である。

「ガアー！」

ポウ！

「それだ！」

「でっ、出た！」

何故出てしまうのか、もっと意味不明である。

「お、マカオと同じ紫パープルファイアの炎か」

「やっぱりこの色が好きかな」

「よーしもっと行くぞー！」

「おー！」

ボウ！

ボウ！

ボウ

「その調子だ！」

「ウリヤア！」

「ゴオ

「はあはあ、もう、無理……」

「じゃあねえなあ、ほら」

ボツ！

「なに？」

「喰え」

「…へ？」

「喰ったら力が湧いてくるぞ！」

そんなわけは無い。それができるのは滅竜ドラゴン魔導師スレイヤーの人間だけである。

「じゃあ食べる！…アツツ」

「やっぱり、無理か」

「分かってたならやらせないですよ！」

涙目で訴える。

「す、すまねえ」

「もう！ナツ兄には頼まない！」

「あっ、おい！」

ロメオが走り去ったあと、しょんぼりしたナツが一人残された。

「取り敢えず紫パープルファイアの炎をいっぱい出せるようにしないと」

ボウ　　ボウ　　ボウ　　…ポツ…ポツ…ポフツ

「あれ？もう魔力が…」

魔導師の子と行ってもまだまだ子ども。魔力が足りない。

「食べてみるか…いやアレはやっぱりいけな感じがする」

あーでもないこーでもないと考えて、出た答えは…

「魔力だけ吸収する…これだ！」

自分で出した炎を魔力に戻そうとする。が、失敗。

「うーん戻らないなあー」

「どうしたの？」

「え？誰？」

「ああ、ちゃんと会うのは初めてだね。私はルーシィ、よろしくね」

「うん！俺はロメオ、よろしくねルーシ姉！」

「で、何を悩んでたの？」

「自分で出した魔法を魔力に戻して吸収できないかなって」

「それは、無理かなー」

「どうして？」

「それはとんでもなく難しい技術だと思うわよ。多分フィオーレでも出来る人はいないんじゃないかな」

「そっか…」

「でも、その考えはいいと思うよ」

「ありがと！ちよっとミラ姉のところ行ってくる！」

「あ、うん、いってらっしゃい…ホントに元気ねえー」

「ミラ姉、ちよっといい？」

「なにかしら？」

「接収テイクオーバーってどうやるの？」

「接収テイクオーバー？」

「うん、どうするの？」

「うーん、ちよっと難しいけど簡単に言うと…吸収したい相手の魔力を全部取り込むのよ」

「どうやって？」

「まず、相手を弱らせてからこの魔法を使うのよ」

ミラの手から魔法陣が現れる。

「その魔法教えてー！」

「ちよっとだけだよ？」

「ありがとー！」

〜ギルド裏の空き地〜

再び空き地に戻ってきたロメオ。ナツはもういない。

「ふー、この吸収魔法を使えば…」

ボツ！ シュウー…

「おお、戻ったぞ」

何と、今まで、誰もが、考えた事はあったが完成まで持っていくことが出来なかった魔法の使い方を完成させてしまった。

「これなら俺でも戦える」

ゴオオオ

「おっと、火事になるところだった」

危ない危ない、と冷や汗をふく。そして、ロメオはそれから何時間も練習を続けた。

～夜 ギルドにて～

「マスター、みましたか？」

「ロメオの事か？それなら見たぞ。素晴らしい才能じゃ」

「ええ、テイクオーバー接収の吸収の段階まで一時間もたたずに習得しました」

「ほう、一時間か…ギルドの未来は安心じゃの」

「そうですね。次の時代のリーダーになれると思います」

そうして夜は更けていく。

3話

〜4日後〜

「じーちゃん、とーちゃんは？」

「しつこいの〜、まだ連絡は無い」

「だったら捜してよー！」

「やかましい！魔導師の子なら信じて待っておれ！」
「……」

じーちゃんのバカ……！

「ちよっとマスター、言い過ぎですよ」

「かまわん、このくらいがちょうどいいのじゃ」

「…もっ、いいよ」

「なんじゃ？」

「捜してくれないなら自分で捜しに行く」

「ま、まつのじゃ……」

「うるさい！」

「グフッ！」

痺れを切れしたロメオは走り出した。止めようとするマスターの顎に鋭い右フックをぶち込みマカオがいるハコベ山へ向かって。

「ま、マスター 大丈夫ですか」

「…ムウ、中々いい拳じゃ……」

「そんなこといつてる場合ですか！」

「そうじゃな…ナツ！」

「あ？なんだ、じつちゃん？」

「すまんが、ロメオを追いかけてくれんか？」

「よし！任せろ！」

「オイラも行くよ！」

ナツとハッピーもすぐに後を追いかけた。

「あ、私も行く〜！」

ついでにルーシィも。

「大丈夫でしょうか？」

「なに、彼奴らも手加減くらいできるじゃろっ」

「ロメオじゃなくて、ナツたちの方です」

「どういふことじゃ？」

「ロメオにせがまれて魔法を少し教えたり、ギルドの書庫に案内して上げたりしたんですよ」

「なんと…」

「そしたら、どんどん魔法をおぼえちゃって。しかも、かなりの腕前ですよ。つい、本気をだしちゃいました」

「…つい、ではすまんじゃろっ」

やはり、このギルドには同類が集まるか…

マカロフはまた頭を抱える。

くハコベ山 麓

「とーちゃん、待っててー！」

絶対に助けにいくから！

「待て」

「ナツ兄　それにハッピーとルーシー姉も！」

「ロメオ〜戻ろうよ〜。皆心配してるよ」

「そうよ、マカオさんは私たちが捜すから！」

それじゃ…それじゃ…

「それじゃダメなんだ」

「」

「俺は！俺が出来る事をやるんだ！そのために、まだ上手くはできないけど魔法も覚えた。だから…」

「……」

「邪魔するならナツ兄だってぶっ倒す」

「…そうか」

「ナツ？」

「かかってこいやー！」

指先にCOME ONと炎を生み出し挑発するナツ。

「行くよ」

「こいや！」

「パープルファイア紫の炎」

「火竜の咆哮」

ロメオは最初に比べればかなり大きな炎を生み出したが、ナツはその一回り以上も大きな炎のブレスを吐き出す。

「どうした！そんなもんじゃねえだろ！」

「くっ、まだまだ！パープルファイア紫の炎！」

「きかーん！」

いくら魔法は上達したと言ってもまだまだひよっこのレベル。さ

らにナツに炎は効かない。

「火竜の鉄拳！」

「グウツ」

「ロメオ ナツ！やりすぎよ！」

ルーシィも流石に子ども相手への威力とは思えない攻撃に口を挟む。

「ルーシィ、少し黙っててくれ」

「でも！」

「これは覚悟と覚悟のぶつかり合いだ。他人が口を挟んじやいけねえ」

「！……」

ナツの剣幕に気圧されルーシィは口を開けなくなってしまった。

「パープルファイア紫の炎」

ボツ

「あ？俺に炎は効かねえぞ」

「パープルファイア紫の炎」

ボツ…ボツ…ボツ

「こんなもん喰ってやるよ！」

スウウウウ

「…きた」

「？」

大きく息を吸いロメオの炎を吸い込んで行くナツ。しかし不敵に笑うロメオ。

「オレンジファイア橙の炎」

「…く、臭えエエエ」

炎をドンドン吸い込むナツの目の前にオレンジ色の炎を投げ込んだロメオ。

「オレンジファイア橙の炎は強烈な臭いを出す炎！ナツ兄の鼻ならダメージも強烈なはず！」

「ぐ、グオオオオ…ハナが…！」

「パープルナックル紫の炎拳」

「カハッ！」

鼻を抑えて震えているナツの顔面に炎を纏った拳を捻じり込む。

「俺だって今まで練習して来たんだ」

「くっ、火竜の咆哮！」

「吸収」

今度はロメオが、炎を吸収する番だった。そして…

「なっ」

「スリープ」

「フニャッ！…ねみい…ZZZZ」

「ナツ」

「はあ、はあ、やった…」

なんとロメオがナツに勝ってしまった。

「嘘でしょ…？ナツがこんな小さい子に負けちゃった…」

「あい、寝てるだけだけどね」

「…はあ…はあ…ルーシィ姉も…邪魔するの…？」

「…本気なの？」

「当たり前だよ…」

「じゃあ、手伝って上げる！」

「…本当？」

「うん！ね、ハッピー？」

「あい、ナツも負けちゃったしね」

「ありがとうルーシィ姉、ハッピー！」

(…！可愛い…いやいや、子どもよ！しっかりしなさいルーシィ・ハートフィリア)

笑顔で礼を言うロメオとその笑顔に開いてはいけない扉を開きかけているルーシィ。そして、ニヤニヤするハッピー。

「それ以上はダメだよ、ルーシィ」

「分かってるわよ！」

「？」

フェアリーテイルはいつでもどこでも騒がしいらしい。

「さあ、マカオさん捜しましょう！」

「あい！」

「うん！」

「…ZZZ」

「…あ」

すっかり忘れてた。と、全員の内がたった一言にこめられて漏

れ出てしまった。

「ナツ、どうしよう」

「起こしましょうよ」

「取り敢えず殴れば起きるかな？」

「なんて恐ろしいこと言う猫ちゃんかしら」

「あ、俺起こせるよ」

「「なら最初から起こしてよ！」」

「「じめんじめん」」

眠らせる事ができるのに起こせない訳が無い。もっとも、術者が起こせない危険な魔法もあるが。

「…んあ？…ロメオこのヤロー　まだ勝負はついてねえぞ！」

「コラ、ナツ！暴れないで！」

「そーだよ、どんな形だろうとナツは負けちゃったんだよ」

「あ、俺ナツ兄に勝ったんだ…」

ナツは起きるなり暴れ、ロメオはロメオで今更自らの勝利に気づく。

「まあ、負けたんだ。俺も手伝ってやる」

「うんありがと、ナツ兄！」

今度こそ、本来の目的であるマカオの搜索を始める。果たしてロメオ達はマカオを助けられるのか！

4話

「とーちゃん！」

「マカオー！どこだー！」

「うーんいないわね、と申しております」

「吹雪きが強くて空から捜せないよ」

マカオを捜しはじめて1時間近く。山自体は小さくても吹雪きが強く視界がかなり悪い。

「おいルーシィ、寒いなら帰れよ」

「いやよここまで来て帰るなんて、と申しております」

「ていうかその精霊の使い方あつてるの？」

「オイラは間違つてると思うな」

途中から寒さに勝てず呼び出した精霊、時計座のホロロギウムの中に避難しているルーシィが…

「ウホッ！」

「キヤア！、と申しております」

「いきなりなんだ」

「ウホッ、いい女」

「えっ？ちよ、まっ、助けてー！、と申しております」

「ルーシィ姉！」

突然現れたゴリラの化け物「バルカン」にルーシィが攫われる。

「待ちやがれ」

「ナツ兄、まってー！」

ルーシィはハコベ山の洞窟まで連れ去られ、ホロロギウムは時間通りに帰ってしまう。

「くっ、主人の危機くらい頑張りなさいよ！」

「邪魔者、いない。オデ、女好き」

「ちよつと近寄らないでよ！」

「ウホホ！」

「やつと追いついたぞ！」

「ウホ？」

「ルーシィを返せ！」

「あと、マカオはどこだ！」

ナツ兄、とーちゃんがついでになってるよ…

「ウホ、コツチ」

「なんだ？話わかるじゃねえか」

バルカンの言うことをほいほい信じてしまうナツ。

「ココ」

「あん？なにもねえぞ？ってウワァア」

「

「ウホッ、邪魔者一人消えた」

「ナツウウー！」

「ナツ兄！」

そして、谷につきおとされてしまうナツをハッピーが慌てて助けにいく。

「くっ、私だってやるときはやるのよ！開け、金牛宮の扉タウロス」

「ンMO！」

「ウシ邪魔、オデの女！」

「おれの女ですと？おれの乳とっていただきたい！」

「関係無いでしょ」

精霊を呼び出したルーシィだが呼び出す精霊を間違えたかも、と後悔しそうになっている。

「俺もいるぞ！」

「ガキ、もつと邪魔、きえろ」

「ンMO！私もいますぞ！」

「早く何とかして」

斧を構えバルカンに斬りかかるタウロスと炎を生み出し投げつけるロメオ。

「ウホッ、当たらない」

「いちいちムカつくなあ！」

滑稽な動きで攻撃を避け回るバルカンに苛立つロメオ。しかも

「うおりゃーやっと帰ってきたって

なんか化け物増える」

「MO!？」

「それ、仲間！」

タウロスは帰ってきたナツの一撃により撃沈。

「なにしてくれんのよ！」

「悪い、つい」

「ついじゃないわよ！ムキー！」

暴れるルーシィと適当に謝るナツ。

「ウホッ、オデ男嫌い」

「知るか！火竜の鉄拳」

「ウホッ」

「ナイスナツ兄！紫の炎拳パープルナックル」

「ウホホ」

ナツとロメオの絶妙なコンビネーションでバルカンをぶっ飛ばした。

「ウホッ、本気出す！」

「させるか！」

「まっつてナツ兄！」

「んだよ」

「こいつは俺が倒す！」

「よし、ぶちかませ！」

ロメオが一人で倒すと宣言しナツが激励を飛ばす。

「パープルファイア
紫の炎」

「ウホ」

「パープルファイア
紫の炎包囲網！」

「ウホウ！」

ロメオの凄まじい攻撃にバルカンはどんどんボロボロになっていく。

「凄い……」

「あい、あんなに小さいのにね」

「魔法に歳なんて関係無え、有るのは想いの強さだっつてじっちゃんが言った」

「そこまで、お父さんのことを…」

そしてロメオの最後の魔法が命中して、バルカンが遂に倒れる。

「やったあ」

「あれみて！バルカンの身体が！」

バルカンの身体が光って姿を変えていく。そしてなんとマカオに変わった。

「とーちゃん」

「マカオ！大丈夫か！」

「バルカンは接収テイクオーバーして生きるモンスターなんだ…」

「…すまねえ…こんな情けない姿を…」

「酷い傷…！」

「とーちゃん！今助けるから！」

「…ロメオ…なんでここに…」

「喋るな！今からちつと痛えけど我慢しろよ！」

「ぬう！グツ！がああああ」

「とーちゃん頑張つて！」

かなり危険だがナツの炎による止血は効果的だった。

「ルーシィ！包帯！」

「わかった！」

そしてルーシィの応急手当で何とか一命を取り留める。

「よかった…とーちゃんが無事で…」

「すまねえロメオ。情けない親父で…」

「そんなことないよ！一人で何匹も怪物を倒したんだから！」

「そうか…今度いじめられたら言ってやれ！お前の親父は怪物19匹倒せるのか…ってな」

「違うよとーちゃん」

「なにがだ？」

今のセリフに何処がおかしいところはあったのか、と考えを巡らせるマカオを尻目に満面の笑顔でロメオら宣言する。

「お前ら親子は怪物20匹倒せるのか、だよ…」

5話

「グレイ兄、ナツ兄知らない？」

「あ？知らねえよ、あんな暑苦しいやつ」

「そっか…どこ行ったんだろ」

「ナツならルーちゃんと仕事に行ったよ」

「レビイ姉！それ本当？」

「うん、なんでも本を処分するだけで200万」もらえるんだって」
「に、にひやくまん…」

マカオを助けてから数日が過ぎいつもの日常が戻って来た頃ロメオはナツに魔法を教えてもらおうと思いついたのだが、すでにナツは仲間と共に仕事へ出てしまっていて留守であった。

「私もその仕事受けたかったなあ」

「じゃあ、レビイ姉は今暇なの？」

「え、そうだけど…何々？一人前にナンパ？おませさんだなあもう！」

「」
「」

「ち、違うよ！俺は勉強を教えてもらおうと思って！」

「なんだ、勉強か…」

「あんな小さい子どもに先を越されたのかと思ったぜ…」

レビイにからかわれて顔を真っ赤に染めるロメオ。そしてナンパに反応するジエットとドロイ。

「なーんだ勉強かあ、いいよ教えてあげる。暫く暇だしね」

「ありがとう…」

「どうしたんだ、ロメオ。急に勉強なんて」
「とーちゃんよりスゲー魔道士になりたいから頑張ってた」
「そうか、俺よりすごくなるか！頑張れよ」
「うん！」

そしてロメオはマカオ越えを宣言してレビイと書庫の方へむかうのであった。

「ねえ、ロメオ君」

「なに？」

「ナツに勝ったって本当？」

「うーん…勝ったと思うんだけどナツ兄も油断してたし不意打ちで勝ったみたいだからなあ……」

「でも、勝ったんでしょ！すごいじゃないナツに勝つなんて！」

「そうなのかなあ……」

今だにあの勝ち方には不満が残るロメオ。やはり眠らせるより正面なら勝ちたいと思うらしい。

「ルーちゃんに聞いたよ、魔法を吸収してねむらせたんだってね」

「うん、テイクオーバー接収の応用なんだ」

「すごいじゃん！相手の魔法を吸収するなんて！」

「でもナツ兄の魔法を知ってたからすぐに反応できたけど知らない相手だったら上手くできるかどうかわかんないよ」

「まだ小さいんだからそんなに気負わなくても大丈夫だよ。まだたくさん時間はあるんだから」

「レビイ姉……」

「あはは、ガラにも無いこと言っちゃったかな？よしそんなことより勉強勉強！」

「そうだね！それでレビイ姉、この本の文字がわからないんだ、教えてくれる？」

「あ、ルーシィ姉お帰り。ナツ兄とハッピーも。レビィ姉の見送りをしてたんだよ」

「へへ、そーなんだ。何、レビィちゃんにホレたの？」

「違うよ！ルーシィ姉までそんなこというなんて…」

「あはははは、ゴメンゴメン。ついね」

そしてシャドウギアと丁度入れ替わる形でナツ達が帰ってきた。

「ナツ兄！俺に魔法教えてよ！」

「おー、いいぞー」

「ありがとうー！じゃ、早速…」

「ロメオくん、まだフェアリーテイルには入らないの？」

「何言ってるんだ、もうロメオははいつてんだろ？」

「でも、ギルドの紋章がないし…」

「……忘れてた」

「なにー！まだはいつてねえのか」

「ちよっと待ってて！すぐにじーちゃんに言ってくる！」

ロメオは焦ってダッシュでマカロフのところに向かった。

「なにも走らなくてもいいのにね」

「仕方ないよ、凄い魔導士になりたいのにギルドに入るのを忘れてたんだから」

「俺達も早く戻って報告しよーぜ！」

「あい」

「そうね」

そしてナツ達もゆっくりとギルドへ戻って行くのだった。

「なんでさー！いいじゃん別に入ってたって」
「やかましい！ダメなものはダメじゃ！お主にはまだ早い！」
「ナツ兄だって小さい頃から入ってたじゃんか！」
「あやつは身寄りが無かったから仕方なかつんじゃ、他の小さい頃から入ってた者もじゃぞ」
「むう…！じゃあどうしたら入れてくれるのさ！」
「もう少し大きくなったらな」
「なんでさー！」
「くどいー！」

マカロフとロメオが大きな声で言い争っていた。

「マスターもロメオもでけえ声だなー」
「そんなこと言ってる場合 止めなくちゃー！」
「待って、ルーシィ」
「ミラさん！でも…」
「マスターはロメオを心配してるのよ、きっと上手く納得させるわ。しばらく見ていませう」
「…そう上手くいくのかなあ」

ミラの予想は半分当たっていた。マカロフはロメオが心配で危険と判断したからギルド入りを許可しない。しかしロメオがあまりに食い下がるためだんだんと頭に血が上り…

「いいじゃろう フェアリーテイルに入れてやる」
「ホント」
「しかーし！条件があるー！」
「条件？」

「フェアリーテイルのS級魔導士の半数以上に認められることじゃあ

「『『『 S級魔導士の半数 『『『

「そしてその証を示せえ」

ロメオ達の話聞いていた周り人たちが驚く。

「マスター、いくらなんでもそりゃねーぜ」

「そうだ、そうだ。子供相手に大人気ねーぞ！」

「やかましい もう決めたのじゃ！変更は無い！」

「…S級魔導士に認められたら入れてくれるんだね？」

「そうじゃ」

「わかった！ナツ兄！俺もすぐにはいるからね！」

「お、おう、頑張れよ」

さすがのナツもS級魔導士はヤバイと感じているらしい。

(さすがのロメオもまだまだ子供じゃのう。S級魔導士は全員で5人、つまり3人以上に認められなければならん。恐らくエルザはロメオをみとめるだろう。しかし他の者は…今のところミラは活動しておらんからS級だとはわからないはず。ギルダーツは帰ってこんしミストガンはデイスコミュニケーションのお手本じゃしラクサスはあの性格…認められる可能性は無い)

マカロフは大人気無くロメオ相手に本気を出していた。

「フフフ…さあロメオ諦めたら」ミラ姉、入ってもいい？」「いいわよ、なに」

「よし、後二人」

「まてえい。なぜミラがS級だと

「気付いた？」

「え？だって有名じゃん、魔人ミラジエーンって」

「もう、それで呼ばないですよ。昔の話よ」

「ゴメンよ、ミラ姉」

マカロフは忘れていたのだ。ロメオがミラと仲がいい事を。失念していたのだ。行動力を。

「ごりゃあヤバイかもしれんなあ…」

6話

「じーちゃん、すげえ魔法教えてよー」

「ダメじゃ、今から定例会に行くんじゃ」

「帰ってきたら教えてよね！」

「わかったわかった、なんでも教えてやる」

「へへっやったー！」

出発直前にやって来たロメオを適当にあしらい約束をしてしまうマカロフ。

「では行ってくるぞ」

「いつてらっしゃい、お気をつけてくださいねマスター」

そしてミラにデレデレしながら定例会に向かった。

「ねえ、S級魔導士はまだ帰ってこないの？」

「うーん、エルザならそろそろ帰って来るんじゃないかしら？」

早くギルドに入りたいロメオは毎日ミラにS級魔導士の行方を聞き、ガツクリしながら帰るのをくりかえしていたが初めていい情報を聞けてテンションが上がった。

「本当　じゃ、誰か換装使える人知らない？」

「換装？ビスカなら使えるわよ」

「ビスカ姉だね？ありがとっ！」

「元気ねえ……」

エルザと聞き、ならば換装について教えてもらおうとしたが最低限使えないといけないと思ひ発動はできるよっにしたいようだ。

「ビスカ姉！換装教えて！」

「な、なによ突然。エルザに教えてもらえばいいじゃない」

「そうだけど、今はビスカ姉じゃないとダメなんだ！」

「あ、あんたねえ……」

「ビスカ」

ロメオの意思は伝わるのだが言葉的に問題があり近くにいたアルザックが少々慌てた。

「いいけど、もう少し言葉を考えてから喋って……」
「え？」

ロメオは天然のようだ。

「まず換装はね、別の空間に保管してある武器とかを手元に呼び出す魔法なの。例えば……家に置いてある剣を山の中で呼び出して使ったりね」

「……ふむふむ」

「それで、何を呼びたしたいの？」

「え？……考えてなかった」

「何よそれ……まあ、とりあえず私の銃かしてあげるから呼び出してみなさい」

「うん……」

ロメオはビスカが呼び出したライフルを受け取りアルザックに渡す。

「え、え？」

「ちよっと持っててアルザック兄」

「う、うん」

突然渡され困惑するも大人しくもっている。

「えっと…どうやるの？」

「銃に自分の魔力をマーキングしてそれを目印に來いって呼び出すの」

「…來い！」

ポンッ

「あれ？弾だけ來ちゃった」

「呼び出せるだけでも凄いわ…」

ちなみにビスカは呼び出せるようになるまで時間がかかっていた。

「戻すのは？」

「いっしょよ、戻れってるの」

「戻れ！」

ジュッ

「おおー」

「…凄すぎるわね」

弾はちゃんとライフルに戻ったようだ。

「今度こそ…來い！」

シュン

「やった！出来た！」

「…天才なのかしら？」

なんと二回のチャレンジで換装が出来てしまった。

「あとは何呼び出すか決めるだけね」

「うーん…」

「焦らずゆっくり考えればいいのよ、呼び出す物は逃げないわ」

「そうだね。ありがとうビスカ姉！」

「構わないわ」

次の日フェアリーテイルはいつもより騒がしかった。

「た、たいへんだあ！エルザが…エルザが帰ってきたあ！」

「「なこいー！」」

…ずーん…ずーん…ずーん、ずーん！

「やべえぞ…」

「ああ、やべえ…」

ナツとグレイが顔を真っ青にして震えている。

「エルザって誰」

ルーシィは周りの慌てように怯える

「エルザってのはフェアリーテイル最強の女魔導士だ…」

「最強」

「ああ、最凶だ…」

「何か違う気がするんだけど…」

「帰ったぞ」

「エルザさんお帰りなさいませー!」

「お帰りなさいませー!」

謎の連携によるフェアリーテイル式お出迎え。

「ミラ、マスターは？」

「今、定例会に行ってるわ」

「そうか…ナツ、グレイ、仲良くやってるか？」

「お、おう、俺たち仲良くやってるぜ…!」

「あ、あい」

「ナツがハッピーみたい」

あまりのキャラの変わり様に驚くルーシィ。

「うむ、喧嘩するのは仕方ないが仲良くしてるのが一番好きだぞ」

「あ、あい」

あのナツが怯える程の人物エルザ・スカーレット。人呼んで妖精女王「ティーターニア」「最強の女魔導士」そして…

「カナ、なんて座り方してるんだ。酒は程々にしろ」

「むう…!」

「ワカバ、吸い殻がおちているぞ。ビジター、踊るなら外で踊れ」

「…なんか凄いわね」

「風紀委員」と呼ばれている。

「ん？みない顔だな」

「わ、私この前入ったルーシイです」

「ほう、噂は聞いてるぞ。なんでも傭兵ゴリラを倒したりメイド奴隷を連れているとか」

「なんか色々間違ってるー」

「エルザ姉！」

「お前は…マカオのところの…」

「ロメオだよ」

「そうか。それで、どうした？」

「フェアリーテイルに入ってもいい？」

「なぜ私に言う？マスターに言えばいいだろう」

「じーちゃんがS級魔導士の許可が無いとダメだって言うから…だからお願い許可して」

頭を深々と下げ拝み倒すようなロメオの突然のお願いにも戸惑うことも無く落ち着いて対応するエルザ。

「ふむ…少し待っている」

そう言ってエルザはナツとグレイの方へ向かった。

「ナツ、グレイ、手伝ってもらいたいことがある」

「エルザが俺たちに頼み」

「ああ、帰ってくる途中に気になる名前を聞いたものでな。アイゼンヴァルト鉄の森

のエリゴールと…」

「アイゼンヴァルト鉄の森って言えば闇ギルドじゃないか」

「あい、それにエリゴールは暗殺系の依頼ばかり受ける危ないヤツなんだ」

「あいつら法律無視だからおっかねーんだよなあ」

「ナツがそれを言うんだ…」

「それで奴らが何かを企んでいるようだな、手伝ってくれ」

「おつよ」

「エルザに頼まれちゃしかたねえな」

「すまないな、明日の朝駅に集合してくれ」

エルザは言うだけ言うと踵を返しロメオの方へ戻ってきた。

「またせたな、詳しくきかせてくれ」

「うん。それでね、入るにはS級魔導士の許可とその証が要るんだ」

「証か…例えば？」

「魔法を教えてもらって直接じーちゃんに見せるよ」

「そうか、では教えてやろう。着いて来い」

「うん…」

エルザはロメオを引き連れ華麗に去って行った。

「…とんでもない人ね」

「あい、それがフェアリーテイルです」